I-5

宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の意義と特質について

On significance of architectural journalism history by *Yoshihisa Miyauchi*

○大川三雄[1]，川嶋勝[2]，矢代眞己[2]，田所辰之助[1]
* Mitsuo Ohkawa[1], Masaru Kawashima[2], Masaki Yashiro[2], Shinnosuke Tadokoro[1]

1. はじめに

前稿では、宮内嘉久による卒業論文と戦前期建築運動の関係性について検証するとともに、卒論での主張が生涯変わらなかったことを指摘した。わが国の「建築専門誌はジャーナリズムではない」[11)]といわれつつ、その課題が『建築雑誌』でも繰り返し特集されてきたように、「建築ジャーナリズム史」の存在は不確かなままといえる。本稿では、宮内の卒論がその後の建築界に及ぼした影響とその特質について考察する。

2. NAU「日本建築運動史講座」

宮内は 1949 年 3 月の東大卒業後に「新日本建築家集団（NAU）」の事務局に就職した。建築運動最大の統一体として 1947 年に結成された NAU の事務局に、宮内は在学中から出入りし、山口文象や高橋寿男などの戦前期の建築運動の当事者たちを「じかに知ることとなった」なかで卒論のテーマが固められたという[1)]。

NAU の活動の柱のひとつである建築運動史研究は、結成年にはじめられた。その活動の結実が 1949 年 10 月から毎週で 10 回開催された「日本建築運動史講座」であった。分離派建築会以降の当事者を招いた討論会では、ガリ版刷の充実した資料が配布され[12)]、その作成を宮内は手がけていた[1)]。第 1 回「総論」の配布資料のひとつが「近代日本建築運動史略年表（附・建築関係雑誌創刊年表）」である。そして、詳細は不明だが、宮内の卒論には「建築関係雑誌創刊年表」が付されていたとされる[1)]。

ふたつの年表はその名称と作成者が重なると考えられるため、NAU の雑誌年表は宮内の卒論の一部であったと考えられる。つまり宮内の卒論は、NAU における戦前期建築運動の当事者たちと接するなかでテーマが育まれ、その成果の一部が NAU の活動へと反映されたものと認められる。そこには、建築運動史に建築専門誌の系譜が並列された特徴を指摘できる。

3. 村松貞次郎「建築関係雑誌年表」

同様の年表は、村松貞次郎の編著に確認でき、「日本の近代建築運動年表」と「建築関係雑誌年表」が並んで掲出されている（表 I）。その掲載書『日本科学技術史大系 第 17 巻 建築技術』（1964）は、「科学の『日本書紀』」[13)]が編纂の旗印とされた叢書の建築編であり、幕末以降 100 年間の関連史料が村松の独力ではじめて体系的に編まれた。のちに日本建築学会が総力をあげて史料を集成した『近代日本建築学発達史』(1972) は、村松の編著を「豊富に発展・充実」させたことが明記されている[14)]。つまり村松の編著は、建築界における『日本書紀』の原型として位置づけられる。

その第 10 章「近代建築運動の展開」の冒頭に「建築関係雑誌年表」は概説文の挿図として掲出された。概説文の叙述が「負うところが大きい」[5)]と特記されたのは、宮内嘉久の論考「日本の建築運動 1920-60――組織・創造・イデオロギー」（1961）[9)]である。それは宮内の卒論が「下書き」[7)]とされたもので、同論における建築運動の時代区分「転換の時代：1920-30」「暗い流れ：1930-45」は、村松の概説文に踏襲された。

宮内のいう「暗い流れ」とは、「建築ジャーナリズムにみられるマルクス主義建築理論の展開とも関連しつつ、一つの飛躍を建築運動にもたら」した新興建築家連盟（1930）が「赤という魔符を張られて壊滅」した時代を指している[1)]。村松によってその叙述は引用され、そうした「変遷のはげしい時代を理解する助け」に 2 つの年表を掲示した趣旨が付言されている[5)]。

また、村松の編著には「建築史方法論・近代日本建築思想史文献」のリストが「NAU 歴史部会編」として掲載された。つまり、わが国の建築界の基本文献たる同書の建築運動史の叙述は、当時の建築界の共通認識として NAU の研究成果に多くを負っていたものと考えられる。そこには、建築運動史に建築専門誌の系譜を重ねてみる宮内の見解が反映されることとなった。

1：日大理工・教員・建築　2：日大短大・教員・建築

4. 座談会「建築ジャーナリズムの動きをたどる」

村松の雑誌年表に示された特徴を明らかにするには、1956 年の日本建築学会創立 70 周年記念座談会のひとつ「建築ジャーナリズムの動きをたどる――関係誌 20 年の歩み」の冒頭に掲載された年表（表 II）と比較検討することが適当と考えられる [15]。20 名の出席者は、市浦健、川添登、蔵田周忠、田辺員人、高橋寿男、浜口隆一、宮内嘉久などで、戦前戦後の建築専門誌の編集に関わった当事者が一堂に会している。

この年表では、「関係誌 20 年の歩み」が終戦年を軸として描かれ、各誌の刊行期間が俯瞰されている。左下には「昭和初頭に廃刊となった雑誌の主な物」として『建築科学』や『Dezam』などの誌名だけが付記された。これらは村松の年表では中央に示されている。なかでも『Dezam』は、京大建築学科の西山卯三らのクラス会にはじまる活動の機関誌であり、ほかの学協会誌や市販誌とは性質を異にしている。つまり、村松の「建築関係雑誌年表」は、その表題が中庸な用語なのに対し、対象雑誌と掲載方法には偏向が認められる。

5. 宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60」

宮内卒論が下敷きとされた「日本の建築運動 1920-60 ―― 組織・創造・イデオロギー」は、当初の執筆テーマが“昭和期のモダニズム建築”だったと考えられる。同論が所収された『世界建築全集 9 近代』の全体は、欧米と日本のモダニズム建築が時系列で構成され、宮内は「明治・大正初期の建築」（関野克）につづくかたちで殿（しんがり）を務めているためである。

そこには新興建築家連盟の「思想闘争」を受け継ぐ『Dezam』誌などの記述も忘れられていない。「建築思想の発展がすべてなんらかの形で建築運動とからみあいつつ形成」され、「それが建築ジャーナリズムの発展と深く関連」することが強調された [1]。

本論は、日本のモダニズム建築という執筆テーマが、表題で建築運動へと転換され、副題でイデオロギーへと引き寄せられていた。その叙述の主眼は「建築ジャーナリズムにみられるマルクス主義建築理論の展開」に置かれていたものと考えられる。

6. まとめ

宮内嘉久の卒論は、NAU による建築運動史研究の一部として資料に反映されることで、基本文献となる村松貞次郎の編著に引用され、建築運動史の叙述に建築専門誌の系譜が重ねあわせられていった。そこでは特定のイデオロギー色の強い運動体と雑誌の関係性に焦点が当てられながら、「建築ジャーナリズム史」が描かれようとしていた。

1970 年代以降、村松が「戦前の近代建築派の闘いにあまりにも高い評価を与えすぎ」たと回顧したように [16]、運動史への研究熱が冷めていくなかで、宮内による思想闘争あるいは職能論としての「建築ジャーナリズム史」への関心も薄らいでいった。

表 I　村松貞次郎の編著における年表

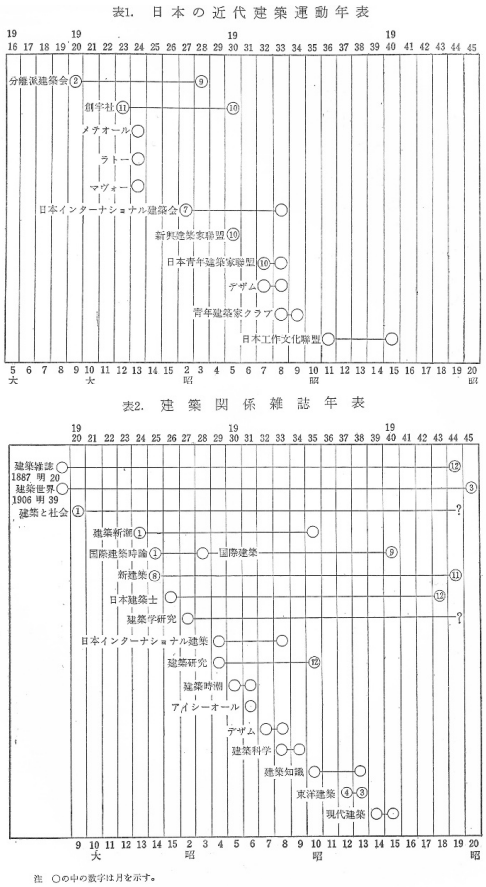
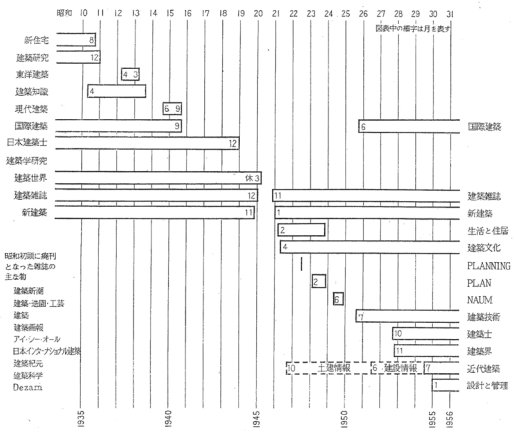


表 II　日本建築学会座談会における年表



引用・参考文献　1）～10）前稿参照

11) 馬場璋造「建築専門誌はジャーナリズムではない」、『建築雑誌』、1977 年 11 月号（特集「建築ジャーナリズム」、編集委員長・近江榮）

12) 本多昭一著、松井昭光監修『近代日本建築運動史』、ドメス出版、2003 年

13) 中山茂「日本科学技術史大系・地球・宇宙科学編の編集を終えて」、『天文月報』、1965 年 4 月号

14) 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』、丸善、1972 年

15)「建築ジャーナリズムの動きをたどる――関係誌 20 年の歩み」、『建築雑誌』、1956 年 4 月号

16) 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』、日本放送出版協会、1977 年